様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：２７１０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１２８６７

研究課題名（和文）現代フランスにおける死者の記憶：文学作品とモニュメントの分析を通じて

研究課題名（英文）Memory of the Dead in Modern France: Through Analysis of Literary Works and Monuments

研究代表者
福島　勲（Fukushima, Isao）

北九州市立大学・文学部・准教授

研究者番号：３０４２２３５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：ヴェルダンの追悼施設やリヨンのレジスタンス強制収容歴史センターといったモニュメントないし追悼施設においては、死者は聖別され、さらに、明確な輪郭を持った存在として扱われることが多い。そこには、そうした記憶装置を設置した国家や共同体といった「設置者」の意志が色濃く反映している。それに対して、文学においては、G・バタイユの『C神父』に見られるように、死者の記憶を固定化するというよりは、むしろその輪郭を曖昧なままに維持するという傾向・手法が見られる。そこで意図されているのは、死者たちの政治利用とは反対に、むしろその不可能化であると結論される。

研究成果の概要（英文）：In monuments or memorial facilities such the Douaumont Ossuary in Verdun and the Center for the History of the Resistance and Deportation in Lyon City, the dead are sanctified heroically. In this way, the “founder" of the state or the community is deeply imprinted for political purposes. On the other hand, in literature, there is a methodical tendency to maintain the ambiguity of the dead instead of strong heroic profiles as observed in G. Bataille's L’Abbe C. It is possible to conclude that it is not only that literature subdues the dead for political persuasion but that it also makes it implausible.

研究分野：フランス文学・思想

キーワード：モニュメント　記憶　死者　文学

１．研究開始当初の背景

この研究テーマを構想するきっかけとなったのは、2012 年に岩手大学でエリック・ブノワ氏（ボルドー大学）を招聘して行われた日仏国際シンポジウム「文学における〈喪〉、そして共同体の再構築」への参加である。そこで突きつけられたのは、東日本大震災以後、死者たちの記憶を抱え、共同体を破壊された被災者たちに対して文学ができることは何かという問いである。本研究者は、アラン・レネ監督／マルグリット・デュラス脚本の映画『ヒロシマ・モナムール』についての発表を行い、過去の死者を女が語り男が聞くその〈場〉そのものが、他人同士であった男女を結びつける〈喪〉の共同体を構成していることを指摘した。そこから死者、語り＝文学、共同体という結びつきへの興味が芽生えた。その後、2014 年度日本フランス語フランス文学会春季大会（お茶の水女子大学）のワークショップ「死者の記憶と共同体」に登壇し、ジャン・ムーランをパンテオンに聖別する際のアンドレ・マルローの演説の分析（竹内修一）、戊辰戦争から日露戦争を経て第二次世界大戦後にいたる会津の人々が自己投影する対象がいかに変遷してきたについての分析（田中悟）を通じて、死者の記憶がいかに選択的に選ばれ、ときに想起＝顕彰され、ときに簡単に忘却されていくかの歴史的な実例に触れることができた。そして、彼らの報告例との対照によって、デュラス的な共同体の再構築は、死者の忘却ではなく、死者の記憶の積み重ねによって成立しているという決定的な差異を発見することができた。

２．研究の目的

ピエール・ノラ編『記憶の場』の登場以降、記念建造物、慰霊碑、追悼施設、銅像、パンテオン、聖遺物、展示施設といったモニュメント群には、過去の偉人たちの記憶を純粋に伝達するという目的だけでなく、王国、教会、共和国、国民国家といった設置者への忠誠ないし帰属意識を高める意図を読み取ることが一般的になりつつある。では、こうした機能を持つモニュメント群と比較したとき、作家という個人から生まれる文学作品は一体どのような存在として立ち現れるだろうか。とりわけ、死者の記憶を扱う作品は、誰に向かって、何のために書かれているのだろうか。国家による死者の顕彰装置（モニュメント）との対比において、現代フランス文学の作家たちが死者について「書く」ことの意味について考えること、それが本研究の目的である。

３．研究の方法

研究分野に関する基本的な地平を確認すべく、Paul Ricœur, *La mémoire, l'histoire, l'oubli*（Éditions du Seuil, 2000）と Johan Michel, *Gouverner les mémoires, les politiques mémorielles en France*（P.U.F., 2010）といった文献の精読から始めた。その上で、フランスのモニュメント（記念建造物、慰霊碑、追悼施設、銅像、パンテオン、聖遺物、展示施設等）について、国内で文献資料調査、現地フランスでの実地調査を行った。その際、留意したのは、「いつ」「誰が」「どこに」「誰を」「どのような形で」「誰に向かって」「どのような意図で」モニュメントを制作したのかということである。また、死者を扱った現代フランス人作家たちの作品例として、とくにジョルジュ・バタイユとマルグリット・デュラスに着目し、そのテクスト分析を通じて、死者の記憶の語り方（語らせ方）を析出した。上記の作業を経て、モニュメントと文学作品について、死者の記憶と共同体、ないしは死者の記憶と生き残った者たちという観点から、両者の類似と差異とを比較検討した。

４．研究成果

（1）先行研究の発見：

研究計画の冒頭にあげた二つの著作を通じて、Henri Rousso, *Le syndrome de Vichy : de 1944 à nos jours*（Éditions du Seuil, 1987 et 1990）という、戦後フランスの歴史観の転換に決定的な影響を与えた文献資料と出会い、研究の地平を大きく広げることができた。

（2）第二次世界大戦を「負の記憶」とする日仏共通の問題意識の発見

とくに(1)の著作を通じて、フランスが第二次大戦中の歴史を近年まで負の記憶として封印してきた事実について知見を得た。そこから、日本とフランスが戦中の記憶についてかなり近い問題意識を有していることを見出し、本研究の超域性を確認することとなった。その結果、本研究の補助線として、長田新編の作文集『原爆の子』を対象に、その記憶の継承と忘却、現在にいたるまでの記憶の変化のあり方を、フランス文学・思想研究の知見を利用しながら、論文にまとめた（「被爆体験の〈存在〉と〈時間〉-長田新編『原爆の子』と土田ヒロミ『ヒロシマ 1945-1979』をめぐって」）。

(3)パリの同時多発テロ事件（2015 年 11 月 13 日）との遭遇

研究計画を立案した段階では予想もできなかったことだが、滞在地パリで大規模な同時多発テロ事件が発生し、その犠牲者たちのために共和国広場が一時的に国家の霊廟となり、アンヴァリッドが追悼施設と化すなどの現象を目の当たりにすることとなった。思いがけないアクシデントではあるが、目の前で進行していくテロ事件の死者たちをめぐるフランス共和国政府、市民たちの対応について、現地で直接・間接に資料を収集した。その結果は、現地からの速報というかたちで日本の週間紙上に記事（「パリ、テロ襲撃「以降」〈非常事態宣言〉下のフランスから」）として発表した。ただし、この大事件の記憶化を総括するには、

さらに長期にわたる観察が必要であり、今後も研究課題として継続したい。

(4)死者の顕彰施設の調査・実見

パンテオン、アンヴァリッド、凱旋門の無名戦士の墓、マリアンヌ像、共和国広場、サクレ・クール寺院、ジャン・ムーラン博物館、ル・クレール将軍博物館、ホロコースト記念館、モン・ヴァレリアン要塞（以上、パリ市および郊外）、ルーアン市のジャンヌ・ダルク歴史館、リヨン市のレジスタンス強制収容歴史センターの調査と現地での資料収集を行った。いずれの調査でも少なからぬ発見があったが、とりわけリヨン市レジスタンス強制収容歴史センターでは、2011 年の調査時には存在していた入口の脇にあった、地下の「拷問室」とされる場所を見せていた開口部が閉鎖され、あたかも何もなかったかのように改装されているのを発見した。展示方法も時間とともに変化することの具体的な一例を確認することができた。

(5) ヴェルダン市の第一次世界大戦戦没者慰霊碑ならびに戦争遺跡群

とりわけ、本研究のモニュメント調査において、その規模において群を抜いていたのが、ヴェルダン市の第一次世界大戦戦没者慰霊碑ならびに戦争遺跡群である。そこには、第一次世界大戦の激戦地となった当地で戦士した兵士たちの巨大な追悼施設、広大かつ整然と並ぶ広大な墓苑、ガラス越しに垣間見られる身元不明の人骨が顕彰されている。加えて、その敷地には、非キリスト教徒の戦死者たちのための追悼施設も備えられており、国家が顕彰する戦死者の範囲を考える上でも、そうした追悼施設の建設の歴史を追うことは極めて有効であり、実証的な制度研究となろう。今後も研究課題として継続したい。

(6)8 名の無名戦士（Soldats inconnus）の墓

さらに、パリの凱旋門には、第一次世界大戦の戦死者を追悼するための場として「無名戦士の墓」が置かれている。これは、特定の戦死者の追悼施設ではなく、大戦のフランス人戦死者全てを追悼するために、あえて名前を伏せた「無名戦士」を代表としてパリの中心に墓所を設置したものである。その前では、毎日、国家による追悼と顕彰の儀式が行われている。ところで、この「無名戦士」はそもそも 1 名ではなく 8 名存在していた。つまり、1 名だけが選ばれ、凱旋門に埋葬され、顕彰の対象となったという経緯がある。実際、有名になりそこねた残り 7 名の「無名戦士」はヴェルダン市に埋葬され、目立たず顕彰されている。こうした追悼対象の選定の過程を追跡することで、フランスにおける死者の顕彰のあり方やその概念が明らかになるだろう。今後も研究課題ととして継続していきたい。

(7) ニースのテロ事件（2016 年 7 月 14 日）との遭遇

また、これも研究計画を立案した段階では予想もできなかったことだが、2015 年 11 月のパリのテロに続いて、翌年の革命記念日にニースの目抜き通りであるプロムナード・デ・ザングレで観光客の列にトラックが突入し、84 名の死者が出るというテロ事件がフランス滞在中に起きた。この場合はすぐに現地入りすることはしなかったが、2017 年夏に調査に入り、テロ事件の一年後、現地はどのように事件現場を管理し、その記憶を扱っているのかを調査した。意外にも恒久的なモニュメントは設置されておらず、大通りではなく、大通りの反対側にある建物の敷地内に、仮設というかたちで追悼の場が設けられていた。観光地という性格上、あまり事件のことを強調するのがはばかられているのかまだ判断がつかないが、どのようなかたちでこの記憶を伝えていくのか、パリの場合と同じように、時間をかけた追跡調査が必要である。今後も定点観察を継続していきたい。

(8)文学作品における死者の記憶

文学作品に現れる死者の記憶をめぐって、G・バタイユの『C 神父』（1950 年）の詳細なテクスト分析を行った。その成果は２つある。(a)従来、この作品はバタイユの思想と結びつけられた審美的解釈が主流だった。しかし、主人公がレジスタンスとして設定されていることに着目し、戦後すぐの混乱したフランスの社会状況を参照することにより、作品の解釈を審美的解釈から倫理的解釈へと転回させた。この社会状況への実証的な参照が可能になったのは、本研究で発見した Henri Rousso, *Le syndrome de Vichy* のおかげである。(b)さらに、本論文は内容においても本研究に直接に関わるものである。つまり『C 神父』の語りとは、ほぼすべて死者の言葉をめぐる生者たちの伝言ゲームといった様相を呈しており、そこには死者の記憶というものの曖昧さ、死者をめぐる言説の確定不可能性といったものがまとわりついている。バタイユはこの確定不能性に着目しながら、人間のコミュニケーションの一方通行性（すなわち、本当にコミュニケーションが双方向に通じ合ったかは永遠に藪の中である）と双方向性への希望を表現している。これらの成果は論文（「至高性から人間性へ　G.バタイユ著『C 神父』におけるレジスタンスの裏切りと赦し」）にまとめられた。

(9)死者シモーヌ・ヴェイユを語るバタイユ

シモーヌ・ヴェイユの死後出版である『根をもつこと』を書評しながら、バタイユは故人についての記憶を語る。ただし、その語り口は死者を聖別する語りとは一線を画しており、そこの文学に特有の語り口を見ることができるかもしれない。また、ヴェイユとバタイユの両者に共通する純粋贈与への傾向を指摘した上で、その傾向が自己犠牲という

かたちで発露されたとしても、後の権力はそれを容易に利用し、当初の純粋性が保てなくおそれがあるのではないかという側面の指摘も行った。こうしたアプローチには、モニュメントの調査分析で得た、記憶のマネージメントをめぐる歴史・実証的な知見が活用されている。

(10)研究全体の総括

モニュメントや展示施設においては、死者は聖別され、さらには明確な輪郭を持った存在として扱われることが多い。そこには、そうした記憶装置を設置した「設置者」の意向が色濃く反映しており、展示物が与える印象をコントロールしたいという設置者の意志を強く意識せずにはいられない。だから、リヨンのレジスタンス強制収容センターの場合のように、設置者の意向が変われば、展示の内容も変化していくのである。一方、文学においては、死者の記憶を固定化するというよりは、むしろその輪郭を曖昧なままに維持するという傾向・手法が見られるように思われる。

したがって、キリスト教が死者キリストの顕彰によってその共同体を構成・維持しているのと同じ仕方ではないにしても、少なくとも死者の顕彰が共同体の構成・維持に一定の役割を果たしていると結論することができるように思われる。他方、文学は、死者の記憶を一つの方向に誘導することもその権能としては可能であるが、少なくともバタイユやデュラスといった作家たちは、死者の記憶を想起させつつも、同時にそれを曖昧な方向へ開いていく方法を選んでいる。この手法には現代フランス作家たちが死者たちについて「書く」ということの意味の一つを見出すことができるのではないだろうか。すなわち、権力や共同体が死者たちに明確な意味を与えたがるのに対して、作家たちは死者の輪郭を曖昧し、その存在を意味の彼方へと不断に押し戻そうとする。そこには人間という存在が、権力や共同体の利害の網目に絡め取られてしまうことへの抵抗であり、人間をたんなるモノへと還元することへの戸惑いが表現されているのではないだろうか。

(11)今後の研究課題について（A）

本研究を通じて、次に進むべき研究課題、上記の(3)（5）（6）（7)が発見された。とりわけ、ヴェルダンに関しては、そのモニュメントや戦争遺跡だけでなく、ヴェルダンをモチーフにした映画や文学といった表象物も視野に入れることで、より包括的に記憶の想像界を再構成することができると予想される。

(12)今後の研究課題について（B）

また、本研究を遂行しながら、死者の記憶を表象する手法についても同時に考えざるをえなくなった。具体的な銅像にするのか、象徴的なオブジェにするのかなど、状況によって、さまざまなヴァリエーションがある。こうした状況は映画表現においても議論されており、例えば、ホロコーストという大量の死者たちをめぐる表象の問いがある。ホロコーストをハリウッド流に再現して表象するのか、それとも現在の証言だけで組み立てるのか、もしくは別のやり方を選ぶのか。こうした表象の手法をめぐる問いも今後の研究に重要な課題として含めていくことが必要だろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

1. 福島勲「至高性から人間性へ　G.バタイユ著『C 神父』におけるレジスタンスの裏切りと赦し」、『仏語仏文学研究』、査読有、東京大学仏語仏文学研究会、第 49 号、459-477 頁、2016 年 10 月。
2. 福島勲「パリ、テロ襲撃「以降」〈非常事態宣言〉下のフランスから」、『週刊読書人』2015 年 12 月 11 日号、査読無、7 面。

〔学会発表〕（計１件）

1. 福島勲「恋人たちの共同体」再考 ―バタイユの物語作品とナンシーの思考から」、ジョルジュ・バタイユ生誕 120 年記念国際シンポジウム「神話・共同体・虚構：ジョルジュ・バタイユからジャン＝リュック・ナンシーへ」、2017 年 4 月 23 日(於慶應義塾大学)、 主催：慶應義塾大学文学部仏文学専攻。

〔図書〕（計２件）

1. 福島勲「違う穴の同じむじな　忠誠なヴェイユと至高なバタイユ」、『別冊水声通信 シモーヌ・ヴェイユ』水声社、139-150 頁、2017 年 12 月。
2. 福島勲「被爆体験の〈存在〉と〈時間〉-長田新編『原爆の子』と土田ヒロミ『ヒロシマ 1945-1979』をめぐって」、中里まき子編『無名な書き手のエクリチュール-3.11後の視点から』朝日出版社、65-74、2015 年。

６．研究組織

(1)研究代表者

福島　勲（FUKUSHIMA, Isao）
北九州市立大学・文学部・准教授
研究者番号：30422356